

悠久の河

2

周藤彌兵衛翁物語

村尾 靖子

出会い

つるは物心がついてからずっと、彌兵衛の岩を削る槌音を聞き、黙々と岩を削る老人の姿を遠くに眺めながら成長してきた。

「お祖父さまと関りが有ると思われたら、村の人たちから、どんな目で見られることやら。くれぐれも言っておきますが、お祖父さまの近くへ行っては、いけませんよ。庄屋の家に生まれながら、あなたのお父上も、私たちもどんなに肩身が狭いことか……。お祖父さまが村の人々から、どう思われているか、つるは知らないでしよう」

いつものように母親の愚痴を聞きながら「そんなこと、どうでもいいや」と、つるは思っていた。幼いころ、父親はつるを背負い川沿いの道を歩き、遠くから心配そうに老人を見つめていた記憶が、幼いつるの心に残っていた。

剣山で一人槌音を響かせる孤独な老人への興味は日増に募り、母親の目を盗んでは意宇川の河原まで、つるは懸命に走った。

河原から、じっと自分を見つめる少女の姿に彌兵衛が気付いたのは、いつごろのことだっただろうか？ 定かな記憶はなかった。

「変わった娘よのお、村の大方の子のように、わしに向かって石を投げるのでもなく、罵るのでもない。いったい、あの娘は何者やら。なぜ、わしの姿を毎日飽きもせず、じっと眺めているのやら」



画 寺戸良信

彌兵衛は、ぶつぶつと呟いた。

彌兵衛は剣山に籠ってから、人の心の変わりようを嫌というほど見せつけられていた。言いようのない孤独感が、彌兵衛を剣山に向かわせ、もう後戻りはできない境地に追い込んでいた。

そのような中で、彌兵衛をじっと見つめる幼い娘の存在は、ともすれば偏屈になりがちな彼の心を少しだけ穏やかにした。

少女は岩山から下りてきた彌兵衛を見ても逃げもしなかったし、恐れもしなかった。おそろしく伸びた髭面の異様な雰囲気のある老人を少女は、しげしげと眺めて、人懐こい笑顔を見せた。「おじいさま、山から下りてきて下さって嬉しいわ。ありがとう」

つるは、真っ直ぐに彌兵衛の顔を見上げた。「ずっと前からね、ここで石切りをするおじいさまを眺めていたの。おじいさまは、おかあさまや村の人たちが悪口を言うほど変な人じゃないわ。わたし、おじいさまの顔を見て、悪い人じゃあないって、すぐにわかったのよ」

「なんと濁りの無い綺麗な目をした女の子じゃが、どこの娘じゃ？ 名は何と申す？ 利発な娘よのお。毎日、毎日、岩の上の爺を見て面白いか？」彌兵衛の目元が細くなり、髭面の口元が、ほんの少し弛んだように見えた。

「わたしの名は、つる」

無垢な少女の表情を見つめる彌兵衛の脳裏に、祖父の家正と初めて意宇川の川土手に立った日のことが鮮明に蘇った。

彌兵衛の生まれ育った日吉村は、村全体が郡内一の巨流、意宇川に囲まれていた。